

。ときめきリーフノベル

# おなご先生

文・高安義郎 絵・芝 章一



原山玄治は小学校の先生になつた。  
きつかけは一人のおなご先生だつた。

おなご先生と会つたのは玄治が小学校五年生の時だつた。玄治は終戦直後父を亡くし、老いた祖母の住む母の実家である漁村に越してきた。母親は近くにあつた干物の加工所で働いた。

玄治は村の小学校に通うようになつたが、なかなか仲間ができなかつた。中学生と間違えられるほど背だけは高かつたが色白でいかにもひ弱そうに見え『青びようたん』のあだ名をつけられた。村の子供達は日焼けした赤黒い顔で、どこぞの原住民のようだつた。そんな中に加工所のせがれで泰三といふ六年生のボスがおり、泰三を中心とした数人の悪ガキ達がいた。

そのボスがある時、

「おめつちの母ちゃん、俺んちの所では働いてんだろ。だからおめえは俺の子分になれ」

そんな事を言つて近づいてきたのだ。玄治は、泰三に逆らえば母親が働けなくなるのではと思つた。とはいへ、子分になりますとも言わなかつた。だがそれからというのも泰三はことある度に子分を使って玄治を呼びだした。

泰三達との遊びは楽しいこともあつた。夏には一日中海で泳ぎ、貝を探つたり大きな網で魚を捕つたりした。玄治はいつの間にか泳ぎが達者になつた。海中に一分以上も潜れるようになつた。だが停留している漁船の下をくぐるのは恐ろしかつた。大人達から

は、『船の下をくぐっちゃいけん』とよく言われたが、なぜいけないのか玄治には分からなかつた。

「この前盗んだのも背が大きかつたから、この子だつたんだよ。警察につきだした方がいいんだけど」

おばさんは玄治を教頭に引き渡すと帰つて行つた。

「おまえ万引きしたんか。おとなしそうな顔をして意外に悪だなあ。この前学校裏の煙のじいさんが押し込んでき

るのだが、いつであつたか海から上がり、休んでいると漁船の下をくぐれなかつたからスイカを盗つてこいと命令された。盗んだ事に罪悪感を感じながらも、スイカは火照つた体にはこの上ない甘露だつた。

玄治の最も嫌だつたのは、時には中学生が数人加わり、雑貨店や駄菓子屋から万引きをすることだつた。それだけは絶対にやるまいと思い、中学生が来るところそり輪から抜け出て隠れたりした。ところがある時玄治がいなくなつたことに気づいた中学生は、泰三に玄治を探させたのだ。渋々やつてきな玄治に中学生は盗んだ駄菓子の幾つかを無理矢理におしつけてきた。玄治は震えながらチュウインガムを手にした。その時だつた。怪しんで付けてきた店のおばさんに見つかつたのだ。中学生達は一目散に逃げ去つた。玄治はおばさんに襟首を押さえられ、学校に連れてこられた。手にはチュウインガムが握られていた。

「玄ちゃんはそんな子じやないつて知つてるもん。でももうあんな仲間と遊ぶのはやめよ。今度誘われたら先生に呼ばれてるからつて言って私の所においで」

先生の胸もとからは甘い香りが漂つた。玄治は先生の胸の中で声を上げて泣いた。

『俺、おなご先生のような先生になろう』

教師をめざしたのは、まさにこの時であつた。

て、スイカやトマトをしょっちゅう盗んで行く子がいると言つていたが、それもお前だろ』

教頭は恐ろしい顔で玄治をにらんだ。

確かにたつた一度だけスイカを盗つたことがある。だが何度もやつているのは泰三達だ。とは言え『それは泰三が』とは言えなかつた。母親が加工所を辞めさせられかねないからだ。黙つていると教頭の鉄拳が飛んできた。玄治は地面に倒れ込んだ。頬が腫れ上がりした。ところがある時玄治がいなくなつたことに気づいた中学生は、泰三に玄治を探させたのだ。渋々やつてきた玄治に中学生は盗んだ駄菓子の幾つかを無理矢理におしつけてきた。玄治は震えながらチュウインガムを手にした。その時だつた。怪しんで付けてきた店のおばさんに見つかつたのだ。中学生達は一目散に逃げ去つた。玄治はおばさんに襟首を押さえられ、学校に連れてこられた。手にはチュウインガムが握られていた。

「玄ちゃんはそんな子じやないつて知つてるもん。でももうあんな仲間と遊ぶのはやめよ。今度誘われたら先生に呼ばれてるからつて言って私の所においで」

先生の胸もとからは甘い香りが漂つた。玄治は先生の胸の中で声を上げて泣いた。

『俺、おなご先生のような先生になろう』

教師をめざしたのは、まさにこの時であつた。